

新島基金による新島講座について

同志社創立百周年記念事業の一環として同記念事業寄付金の一部をもって新島基金が設立されました。

○新島基金の目的

新島基金は、同志社立学の精神にもとつき、人間教育を強化し、教育内容の高度化を図り、教育、研究の国際交流を推進し、もって一国の良心たりの人材の育成に資することを目的とし、

基金の果実をもって (1)新島講座の開設 (2)新たな奨学制度の開設 (3)教育・研究の国際交流の推進などを行うことになっております。

○新島講座

新島講座は、つねに時代を先導する同志社の教育と研究が、更に一層充実、発展し、またその成果が社会の進展に寄与するようにと願って新島基金の目的事業の一つとして設立されたものであり、内外の碩学を招聘し講演会などを開催する講座と、本学園教職員がその研究成果を発表する東京講座の二種類を毎年開催することになっています。

第七回新島講座東京公開講演会

昨年十月十八日(土) 東京・有楽町朝日スクエア(有楽町マリオン十一階)にて、新島講座第七回東京公開講演会が開催されました。

十三時三十分から始まった講演会は、松山総長のあいさつ、園部庶務部長の司会で小原弘之同志社女子大学教授、杉江雅彦同志社大学商学部教授の順で行われました。

演題ならびに講師

○マツタケの文化誌

同志社女子大学教授 小原 弘之

○「カジノ資本主義」の登場

— 高まる不確実性と現代企業の対応 —
同志社大学商学部教授 杉江 雅彦



小原弘之教授

小原弘之教授講演要旨

秋の味覚の王者、マツタケはその異名の通り風格のあるキノコである。同時に気難しく、気位の高いキノコでもある。同時に気温や降水量の微妙な変化がその生育を支配するし、アカマツなどの寄生樹の根に寄生して「菌根」という共生器官を形成しなければ生きてゆけない。この菌根をパイプとして栄養をマツから受けているからである。シイタケやエノキタケなどは腐朽木の組織を、自らが所有する酵素で分解して栄養を摂取するのに対して、マツタケはマツが光

合成で作った糖をエネルギー源として直送して貰う。いわば、シイタケはアパートの一室で自炊生活しても平気だが、マツタケはシェフのいる有名レストランで食事をしたがるし、好き嫌いやも激しい。マツタケの仲間には本邦には三種類、おり、朝鮮半島、サハリン、台湾、中国大陸などにもマツタケそのものがある。北米には別の仲間が三種、ヨーロッパには二種、北アフリカには一種類確認されている。これらは、それぞれの国で最も清潔な地域に棲み、最も爽やかな季節に地中から顔を出す。マツタケの仲間ならではである。マツタケは万葉の昔から日本人に愛されており、「高松のこの峯も迫に笠立ててみち盛りたる秋の香のよさ(万葉集)」「あしびきの山した水にぬれにけりその火まつたけ衣あぶらん(捨遣和歌集)」などと歌に詠まれ、松茸や知らぬ木の葉のへばりつく、「松茸や人にとらるる鼻のさき」など俳句にも登場する。江戸時代の料理書にはマツタケがすでに高級食品として扱われている。マツタケはその形状から、艶笑的に川柳に顔を出し、庶

民のストレス解消に役立っていた。また、マツタケ狩りは、老若男女、身分の貴賤を問わず、昔から楽しまれて来た。太閤秀吉もマツタケ狩を好んだようだ(翁草)。狂言「独り松茸」はマツタケ狩がテーマである。落葉に埋もれて、そっと潜むマツタケを見つけた時、例外なくすべての人が歓声を挙げるから面白い。マツタケには、シロをつくって年々波紋状に広がる性質があるので、一度シロを見つげると数十年間にわたって確実に採取できるから、親子の間でもその位置は秘密にされるのが普通である。このマツタケ狩の風習は日系移民によって北米大陸に伝えられ、現在では三世、四世の人々に受け継がれ、マツシールミンクという一種のスポーツとして定着している。結局、マツタケの気難しさ、堂々たる風格そして幾分コミカルな性質が、日本人の心を把えて離さなかったのだろう。



杉江雅彦教授

杉江雅彦教授講演要旨

昨年から一年間に、円相場は九十円も上昇したが、こんな事態になるとは誰が予想できたろうか。昨今の株式市場をみて、たいした理由もないのに乱高下をくりかえしている。

世界的に不確実性が高まっている、といわざるをえない状態だ。明日を確実に読み取れることは、もはや不可能に近い。このような環境下で、企業は本業に先行投資して需要を先取りするような行動にすっかり慎重になってしまった。その一方でカネがあ

まっているため、債券や株式に投資して、目先の資金運用に汲々としはじめた。

日本で「財テク」とか「特金」などの言葉で呼ばれている企業の余資運用は、何も日本だけでなく世界的傾向であるようだ。なにしろ石油ショック以来、世界経済はスタグフレーションといって、物価高なのに失業者が甚にあふれている、かつて私達が経験したことがない長期不況にさらされてきた（日本は、やや例外に属するが）。

企業にしてみれば、将来の売上げがふえる見通しも立たないのに、工場を建て増したり機械をふやしたりはしたくないにちがいない。それよりも、余ったカネを運用して、短期的利益をあげた方が賢明だ、そんな考え方に変わってきたように思われる。

スーザン・ストレンジという英国の学者は、最近、「カジノ資本主義」という本を書いたが、その中で彼女は、銀行や企業がコンピュータを駆使して外為相場や証券で儲けようとしている姿を、「ルーレットのないカジノ」で投機していると、鋭く現代資本主義の変わりようを分析している。

産業革命以来、世界の資本主義がこころまで発展できたのは、企業家や経営者がイノベーター（革新者）として、情熱をもって本業に取り組み、絶えず投資を行ってきたからだ。しかし最近の企業や経営者からは、そのようなイノベーターとしての活力が感じられなくなってしまった。

現在のような長期不況を「コンドラチエフの波」で説明すると、ちょうど五十年に一回の大きな波の底にあたる。コンドラチエフの波がどうして起るのか、それを理論的にキチンと分析する試みはなされていないが、ひとつの大きな理由は、技術革新で説明できる。

恐らく、これから二十一世紀にかけて、メカトロニクスやバイオテクノロジー、それに新素材など、新しい技術革新の高まりが予想されるが、それに対応して企業家も再びイノベーターとしての挑戦を試みるにちがいない。

新島講座・講演内容公刊について

○第一回講座

「THE LIBERAL ARTS TODAY」

アーモスト大学副学長

プロッサー・ギフォード博士

頒価七〇〇円

○第二回講座

「STREAMS OF GRACE」

—STUDIES OF JONATHAN EDWARDS, SAMUEL TAYLOR COLERIDGE AND WILLIAM JAMES—

ハーバード大学教授

リチャード・ラインホルツ・ニーバー博士

頒価一、三〇〇円

ハーバード大学教授

リチャード・ラインホルツ・ニーバー博士

頒価一、三〇〇円

○第三回講座

「THE PROFESSIONALIZATION OF SCIENCE」

—FRANCE 1770—1830 COMPARED TO THE UNITED STATES 1910—1970—

—FRANCE 1770—1830 COMPARED TO THE UNITED STATES 1910—1970—

頒価一、三〇〇円

—FRANCE 1770—1830 COMPARED TO THE UNITED STATES 1910—1970—

プリンストン大学教授

チャールズ・クルルストン・ギリスピ博士

博士

頒価七〇〇円

○第四回講座

「CHANGING BRITISH VIEWS OF JAPAN SINCE THE 19TH CENTURY」

ロンドン大学 (SOAS) 教授・日本研究

究所所長

ウヰリント・シュラッタ・ベームスリー博士

博士

ウヰリント・シュラッタ・ベームスリー博士

頒価一、〇〇〇円

○第五回講座

「LIBERALISM, CONSERVATISM, AND AMERICAN POLITICS」

コーネル大学教授

セオドマン・J・ロウ博士

セオドマン・J・ロウ博士

頒価五〇〇円

○第六回講座

「CHRISTIAN WITNESS IN CHINA TODAY」

南京大學副学長・南京協和神学院院長

中国基督教三自愛国運動委員会主席

丁光訓先生

○第七回講座

「THEORETICAL AND APPLIED LINGUISTICS, PAST, PRESENT, AND FUTURE」

ロンドン大学 (SOAS) 教授言語学部長

ロント・ンリー・ロウ博士

ロント・ンリー・ロウ博士

頒価五〇〇円

ロント・ンリー・ロウ博士

○第八回講座

「PRAGMATISM AND THE POLITICS OF EPISTEMOLOGY」

プリンストン高等研究所教授

キートン・ホムナー博士

キートン・ホムナー博士

頒価八〇〇円

○第九回講座

「ON TWO PROBLEMS IN THE HISTORY OF SCIENCE」

—THE ORIGIN OF ROCKETS AND CHARLES DARWIN'S CHINESE

—THE ORIGIN OF ROCKETS AND CHARLES DARWIN'S CHINESE

—THE ORIGIN OF ROCKETS AND CHARLES DARWIN'S CHINESE

SOURCES —

中国科学院自然科学史研究所 (北京)
教授
潘 吉星先生

頒価五〇〇円

第一回東京講座

○「環境と法律」

—ハーヴァード・ロー・スクールで教
えて—

元同志社大学法学部教授・現東京大学
法学部教授 藤倉皓一郎

○「時間と人間の経済活動」

同志社大学経済学部教授 榎原胖夫

第二回東京講座

○「白砂を訪ねて」

—鳴き砂の秘密—

同志社大学工学部教授 三輪茂雄

第三回東京講座

○「縁起絵巻の世界」

—日本人の信仰に関連して—

同志社大学文学部教授 笠井昌昭

○「財閥の家憲と華族の家憲」

—とくに財産管理について—

同志社大学商学部教授 安岡重明

第四回東京講座

○「新島襄全集をめぐって」

—新島襄と仏教徒たち—

学校法人同志社史資料室室長

河野仁昭

○「同志社ラクビーとともに」

同志社大学文学部教授 岡 仁詩

第五回東京講座

○「新島襄と科学」

同志社大学工学部教授 島尾永康

○「最近の医療問題」

同志社大学法学部教授 大谷 實

第六回東京講座

○「高齢化社会の生活構造と生活問題」

同志社女子大学教授 坂本武人

○「新島襄と自然科学教育」

同志社大学工学部教授 末光力作

各冊子とも頒価五〇〇円

発行者・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
(電話〇七五―二五―三〇三七〇八)

